10. 戦時中の尚絅

10.1 日本的キリスト教への傾倒

1930 年代になると、ごく一部を除いて日本のキリスト教会は、次第に政府の戦争目的に追随し、やがて積極的に協力するようになっていく。また、天皇制に妥協し、皇道精神にキリスト教を矛盾なくすり合わせようとする日本的キリスト教へと傾いていった。

スティブンス, ロバータ L. (河内愛子訳)『根づいた花 — メリー・D・ジェッシーと尚絅女学院』 キリスト新聞社 2003 年 p.148

三教会同・日本基督教団結成

1912(M45)年 2 月、三教会同が招集された。

三教会同とは、「日本の神道，仏教，キリスト教の各派が集って，国民道徳の向上のため協力を約した会合。内務次官床次竹二郎が提唱したもので，政府の企画，後援によって実現した。床次は，ヨーロッパにおいて宗教が大きな社会的感化力と指導力を発揮していることを知り，日本においても宗教の力を借りて危険思想を防ぎ，社会秩序の安定をはかろうとして，広く宗教界に呼びかけた。1912 年 2 月 25 日華族会館で行われた会同には，神道 13 派代表 13 名，仏教 14 宗代表 50 名，キリスト教からは，メソジスト，組合教会，バプテスト，日本基督教会，聖公会，天主公教(カトリック)の各代表が出席した」。(ブリタニカ国際大百科事典より)

1941(昭 16)年 6 月、国策として日本仏教教団と日本神道教団に並んで日本基督教団が結成され、プロテスタント諸教派が合同した。「…その後欧米教会諸派が移植せられ、その宣教が国内全般に発展するにともなって、教派の数もとみに増加するようになった。これと共に他方各派の間にしばしば合同の議が生じ、海外における教会合同運動の刺激もあって、ついに全福音主義教会合同の機が熟するに至り、たまたま宗教団体法の実施せられるに際し、1940(昭和 15)年 10 月 17 日東京に開かれた全国信徒大会は、教会合同を宣言するに至った。これに基づいて 30 余派の福音主義教会が、翌 1941(昭和 16)年 6 月 24 日および 25 日の両日富士見町教会に開かれた創立総会において、…本教団は成立したのである」。(日本基督教団 HP より)

10.2 翼賛体制下のキリスト教主義学校

このような動きについて、尚絅の宣教師はどう考えていたのだろうか。スティブンスは次のように述べている。

尚絅はこれまでも、どんな国策にも忠実な学校として知られてきた。宣教師たちもそれを認めてきた。彼女たちは日本の国民に好感を持ち、国家神道の祭祀王としてではなく、国家の首長としての天皇を尊敬していた。1912 年、明治天皇大葬の時、皇居のある東京に向かって宮城遥拝することさえ、宣教師たちが問題と感じることはなかった。国体、国策への忠誠はキリスト教の団体にはなじまない、といった気持ちを宣教師たちは見せなかったし、自分たちの行動と神道を結びつけもしなかった。

スティブンス、『前掲書』 p.149

宮城遥拝

1940(S15)年は皇紀 2600 年奉祝の年であり、「大政翼賛会」が結成された。国民や民間団体の活動に対し、軍部の締め付けが強化されていった。

大政翼賛会

仙台のキリスト教主義学校の校長も、県当局に集められ、天

皇と皇后の写真を目立つ場所に置くように指示された。尚絅では扉で開閉する奉安庫を作り、校長室に置いた。

さらに、8 月には県庁から学校に三つの要望が伝えられた。

1　礼拝その他の集会の前に全員が国旗に敬礼、国歌斉唱、宮城遥拝を行なうこと。
2　未だ天皇の写真を奉載していない学校はそれをなすべきこと。しない場合は法的に罰せられる。
3　聖書を教えることは差し支えないが、正規の学科として教えてはならない。

1941(S16)年 4 月の入学式では、新入生は、彼女たちにとって学校行事としては最初で最後となる校歌を歌った。宗教色を出さないよう、その後の行事では校歌を歌うことは自粛することとされたのである。

同年 12 月 8 日の真珠湾攻撃を皮切りに、日米は戦争状態に入る。この日まで尚絅に唯一とどまっていた宣教師アリス・ビクスビーは、翌日拘束され、元寺小路のカトリック教会内に作られた収容所に入れられ、1942(S17)年 6 月、交換船で米国に帰国した。

1943(S18)年 4 月、「仙台尚絅高等女学校」と改称、これを機にそれまで使っていた漢字を正式に改め、「尚綱」を「尚絅」とした。朝の礼拝も聖書の授業も打ち切られたため、その後の入学者の多くは敗戦まで、ほとんど「仙台尚絅高等女学校」がキリスト教主義の学校であることを知らずに過ごしたという。

教科の学習はしだいに農作業や保育所の手伝いなどの勤労奉仕に置き換えられ、やがて勤労動員により、生徒たちは、県内各地や遠くは横浜茅ヶ崎の工場で働くことになった。1945(S20)年 4 月からは、すべての授業が停止された。

1945 年 4 月 2 日の高等女学部卒業式は東京計器茅ヶ崎工場で行われた。

1945(S20)年 7 月 10 日、米軍 B-29 による仙台空襲が行われ、被害は被災戸数 11,933 戸、死者 2,755 人に達した。尚絅は市の西はずれに位置していたため、寄宿舎が全焼した他、被害は少なかったが、焼け出された生徒たちは市の内外に離散した。

『仙台市戦災復興誌』仙台開発局 1981 年

10.3 尚絅らしさの保持

学業、課外活動すべてが崩壊していった時代に、かろうじて持ちこたえることができた「尚絅らしさ」は、音楽と日曜学校であった。

1944(S19)年まで校内リサイタルが春、秋年二回行われていた。またテノールの藤原義江、ヴァイオリンの辻久子など当代一流の演奏家を招いて演奏会が行われた。

エラ・オー・パトリック・ホームの一室で十人足らずの生徒を集め、敗戦のその時までたった一人で日曜学校を守ったのが、音楽教師佐藤みさをだった。それはブゼル、ジェッシーの精神を守ることを意味した。微かな声ではあったが、最後まで祈りと聖書と讃美歌が存在したのはこの場所であった。

佐藤みさを

1888(M21)年 8 月 10 日仙台市生まれ。伊達藩代々の漢学者の家に生まれるが、事情あって母と祖母に育てられ、生活は困窮。1897 (M30)年 4 月、八歳で尚絅の寄宿生、1903(M36)年尚絅女学校入学、仙台浸礼教会にて受洗。1908(M41)年卒業後、ブゼルの指示により四年間音楽を学ぶ。1912(M45)年から 1955(S30)年まで 43 年間、尚絅の音楽教師を務めた。その後も十数年間、尚絅女学校の課外ピアノ教師を務めた。みさをは、和服の似合う、おしゃれで美しい先生で、生徒たちの憧れの的であったという。

1927(S2)年から 1932(S7)年まで尚絅同窓会長。1961(S36)年から三年間、尚絅女学院評議員。女学生時代から 1960 年代前半まで、日曜学校教師、校長を務めた。

第二次世界大戦中、特に後半には礼拝も聖書の授業もなくなり、讃美歌や宗教音楽は禁止された。そのような状況の中で、「授業、文芸会、校外の演奏会のプログラムには、かろうじて音楽性の感じられる時局に添う歌を選び、その間に西洋古典の名曲をもぐりこませた」という。また、学期末のリサイタルを 1944(S19)年まで継続し、課外でレッスンを受けた生徒が様々な名曲を全校生徒の前で披露した。

佐藤みさをはエラ・オー・パトリック・ホームで 1919(T8)年に開校した尚絅日曜学校を、隠れキリシタンのように守り続けた。生徒は減る一方で、1945(S20)年 6 月には最後の一人となった生徒も勤労動員で出席できなくなったが、8 月に戦争が終わると 350 人もの生徒が押し寄せるようになった。1983(S58)年 12 月 1 日、早坂愛生会病院にて永眠。享年九十五歳。晩年まで、みさをを慕うかつての教え子をはじめ多くの人々の訪問が絶えなかったという。

佐藤みさを

小野寺正美（短大英文科 2 期生、内ケ崎作三郎の孫）によれば、尚絅の学生寮では、禁止されたはずの讃美と祈りの時が、夕拝という形で秘かに守られていたという。（小野寺正美、「尚絅女学院に学んだ同窓生の回顧と願い」尚絅学院同窓会編『むつみのくさり』復刊第 11 号 2015 年所収、p.68）